

関宿・赤目四十八滝探訪

- 日時：2012.9.21(金) 8:00~18:00 天気 晴
- 集合：大阪駅前第四ビル前
- 行先：東海道五十三次 四十七番 関宿
- 参加者：環境科 41名

【 関 宿 】

文：三戸 郁子



国内の数ある街道の中で最も有名なのは東海道ではないだろうか。

江戸と京都を結ぶこの街道に 53 ある宿場町の中で

往時の街並が残っているのは関宿のみ。

歴史的な街並を活かした町づくり

保存に取り組んでいる関宿を探訪した。

現地では2班に分かれ ボランティアガイドさんの案内で関宿の中心である
中町を西から東へと進んだ。

一瞬江戸時代に迷い込んだようで「とてもすっきりして綺麗！」が

第一印象だった。町屋の多くは平入の低い2階建ての瓦葺で

庇が遠くまで連なっている 建物の色彩が限定されている

これらにより町に統一感が生じていた。

生活の場でありながらゴミひとつ無い事も・・・。

「関宿」

古代三関の一つで「関」の名もこれに由来する。

1601年 徳川家康が江戸から京都までの東海道に 53 の宿駅を設置。

関宿は江戸から47番目の宿場町で東西の追分の約1.8キロの街道筋に江戸時代から明治にかけて建てられた町屋が200余り現存し昭和59年「国の重要伝統的建造物群保存地区」に昭和61年には「日本の道百選」に選定された。

江戸後期(天保年間)の関宿は「東海道宿村大概帳」によると
家数=632軒 本陣=2 脇本陣=2 人口=1942人

「地藏院」

本尊は地藏菩薩坐像で行基が開創と伝えられ「関の地藏」と呼ばれ現在も多くの参拝者でにぎわっている。

関宿はこの地藏院の門前町として発達した。

本堂・鐘楼・愛染堂の三棟は国の重要文化財。

東海道を旅する人々は道中の安全を祈願して手を合わせた事だろう。



「会津屋」

関宿を代表する旅籠の一つ。

看板の漢字「会津屋」は江戸方面 ひらがなの「あいづや」は京都方面を示す。旅人への心遣いが嬉しい。何より分りやすい。

「福蔵寺・小万の墓」

女性の身ながら仇討で知られる小万。その墓と記念碑が境内にある。

「高札跡」

凝りに凝った建物が現在関郵便局となっている高札跡。

街並に配慮してポストは黒の箱で「書状集箱」と書かれている。

高札場も復元されている。

銘菓「関の戸」

深川屋は寛永年間(江戸初期)創業。屋根つき庵看板(いおりかんばん)が

そのまま残っており風格さえ感じられる。

お土産に買った銘菓はお茶に良く合う。

「橋爪家」

両替商を営む豪商。起(むく)り屋根＝(湾曲した屋根)の建物は関宿では珍しい。

「山車倉」

16基あった関宿の山車(やま)は 飛びきり豪華でこれ以上の事が出来るはずがないということから「関の山」という言葉の語源となった。現在は4台。

「関宿旅籠玉屋・歴史資料館」

「関で泊まるなら鶴屋か玉屋 まだも泊まるなら会津屋か」と言われた

玉屋が復元され資料館に。

使用されていた道具類 浮世絵などが展示。

間口が狭く奥行きが長い。襖で仕切られた部屋が並ぶ。

当時はプライバシー云々なんて言う環境下ではなかったのでしょう。

最大で200人が泊まったそうだから雑魚状態だったのでしょうね。



「伊藤本陣跡」

関宿には川北本陣と伊藤本陣の二つがあった。大名や公家などが利用した格式高い公認の宿舎。現在残るは本陣の店の部分にあたる。

「鶴屋」

関を代表する旅籠で江戸時代の終わりには脇本陣をも務めた。

他の旅籠とは格式が違う！と言わんばかりに千鳥破風(ちどりはふ)が目を引く。



「関まちなみ資料館」

関宿を代表する町屋建築の一つ。

町屋で使われていた道具類や歴史資料などを展示。

街並み保存事業による街並みの移り変わりも知る事ができる。

「町屋の細部の装飾的工夫」

幕板 起り屋根 格子 特に漆喰彫刻 瓦細工は

子孫繁栄・家運長久を願って作られたもの。

多くの人が行き交った宿場町ゆえ

職人の技や家主の力量を見てもらいたかったのかも知れない。

○宿場(宿駅)は荷物などを次の宿へ継送(次送)りを主な業務とした。このことが「五十三宿」と言わず「五十三次」と呼ばれた。

○徳川家康による江戸幕府成立で 江戸と上方を結ぶ東海道は人の往来物資の運搬 情報の伝達など大きな役割を果たしたと思われる。

さらに参勤交代によって街道の整備や 本陣 脇本陣 旅籠を中心とした宿場町が整い栄えていったのでは。

○関宿は明治 23 年の関西鉄道(現 J R 関西本線)の開通で人の往来を生業としていた商売が成り立たなくなり次第に静かな町へと変化していった。
現在でも大きなバイパスや大型商業施設が出来た時生活環境が一変してしまう事がよくある。

○帰路のバスで大阪中の島の高層ビル群を通りぬけた。
時空を飛び越えた気分だった。

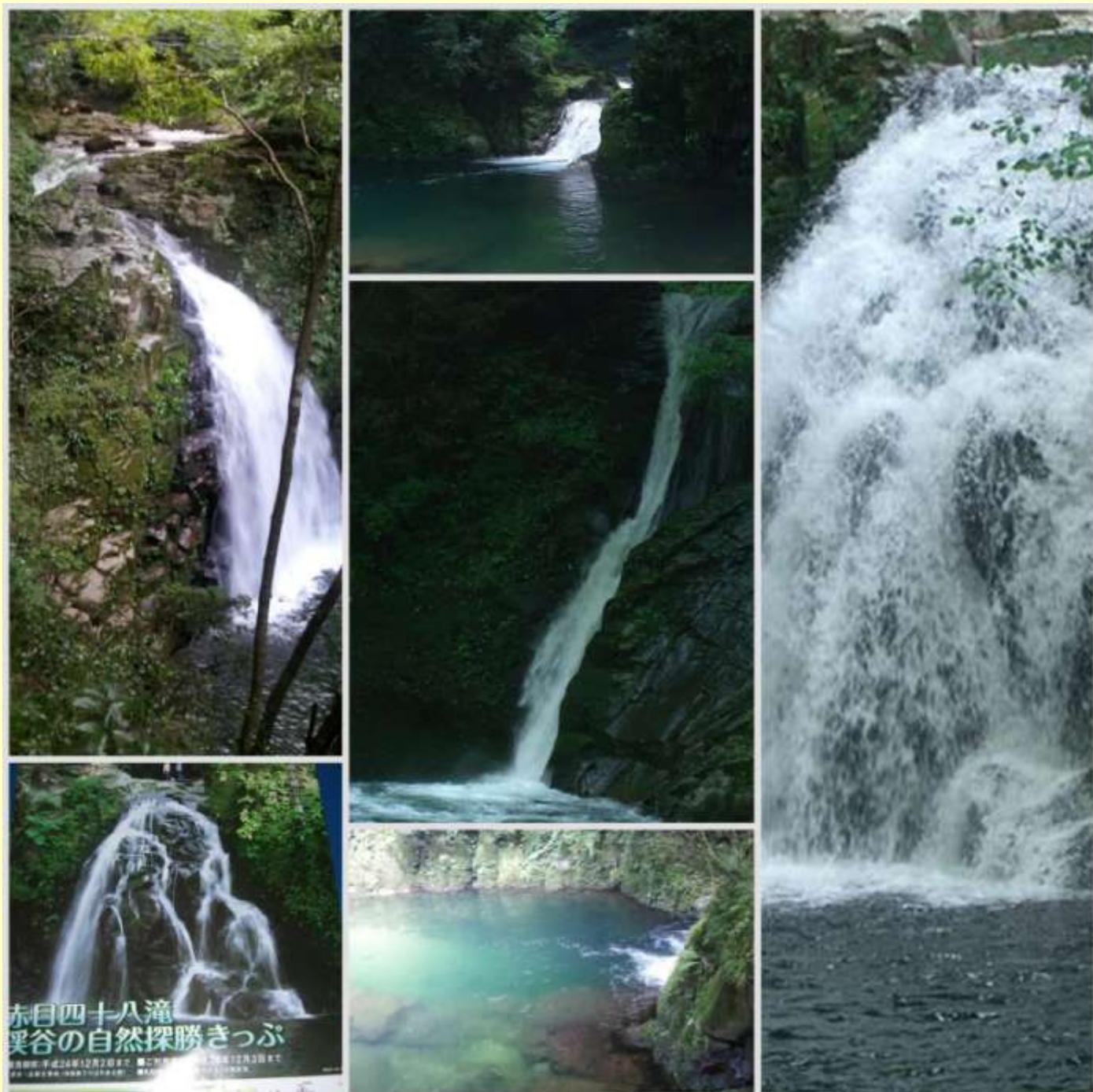
100 年 150 年前の人々はこの風景を想像出来なかつたらう。

そして 100 年 150 年先の風景はどんなものか全く想像できなかつた。



道の駅を後に赤目四十八滝へ

バスで午睡を楽しんで？ 1時間 PM2:00 前に到着



赤目四十八滝は三重県名張市赤目町を流れる滝川の溪谷の一連の滝の総称

「赤目四十八滝」名義で、森・滝・遊歩道・水がそれぞれ、

『森林浴の森 100 選』『日本の滝百選』、『遊歩百選』、『平成の名水百選』に選ばれ、

遊歩道は『美しい日本の歩きたくなるみち 500 選』に「赤目四十八滝へのみち」の名で選出されている。

ガイドさんの解説で、多くの人をひきつける自然を観察し、癒しや観光としてまた修行の場となってきたか、なるほどなるほどと理解を深める。

予備知識なしに、またマイペースで自分の興味の惹かれるところを見て写真を撮り自分自身の感性で歩くメンバーといろいろ。帰ってから解説を見て自分の印象、感じとあっているか違っているか振り返ってみるのも面白い。

いろいろな自然の様相に感動させられ心が癒される。

赤目の名とは違い、樹々繁る緑のトンネルを歩き足元を見れば日頃見慣れぬ草花や緑の絨毯のような苔

また流れの水の量や深みで異なる色、音滝壺の水は深さでみどり色の変化が楽しめた。

秋澄むや山椒魚の棲む流れ

溪流の風になづく水引草

涼新た溪流に沿ふ散策路

秋山 幸子 詠む

さきに街歩きした大阪みなみ・道頓堀とは打って変わった自然観察
こういう時間をもつことで元気復活！

帰って日常に戻ると

領土問題や、技術立国の日本がテレビや携帯電話でガラパゴス化し国力低下の問題が論じられている。

最近の環境変化の速さにはシニアにはついてゆくのが大変でキビしい。

- ・ 技術の進化、加速
- ・ グローバル化の進展
- ・ 人口構成の変化と長寿化
- ・ 社会の変化
- ・ エネルギー、環境問題の深刻化

これからもシニア自然大学校環境科に参加し頭を柔らかく保とう。



写真：井上 加代子 伊月